
ハロウィンの悪夢

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウインの悪夢

【Nコード】

N4195F

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

ハッピー ラブコメ。それはハロウインの夜の事でした。「男なんか大嫌い！」キャットウーマンは叫びます。そこに現れた“見てくれだけは”好青年のアンチヒーロー吸血鬼君。彼に追い詰められた美女の反撃の物語。

1 夢落ちにさせてください（前書き）

ハロウィン明けたその次の日の朝に天からやって来たハッピー
ブコメ。

「ちい遅いんじゃない？」はお許しくださいね

1 夢落ちにさせてください

目が覚めて隣りにそこそこ良い顔の男が寝ていて。

「やっちゃった。」

あずさはむつくりと起き上がり

「しまったなあ」

って顔で頭を掻いた。よりによって

“初めて”

なのに成り行きつてのはどうかと思う。まあだいたい25越えて処女ってのはなしだし、彼の方も

『まさかっ!?!』

って感じで別に罪が有るとは思えないけれど気まずい事には変わりなく

「やっちゃった。」

彼女はもう一度呟いた。日差し明るいマンションの一室。明らかに男部屋。高そうなスピーカーに部厚いヘッドホン。寝ているベッドは明らかにシングルよりもでかい。

お酒を飲んでいた訳でもないし、記憶が無い訳でもなし。彼が一見さんって訳でもない。むしろ、このひと月微妙にアプローチされていた男でまあ知らない仲じゃないし、可能性的に

“こうなっちゃう”

事もなくはない。それにしても

「やっちゃった。」

何しろ彼女、男が大嫌いだったから。関わりになんかなりたくないのにこんな事になるなんて。高い所から見下ろされる感覚も、偉そうに指図したがる傲慢な所も、口先だけで調子の良い所も、髭が生える事も、その存在全てが大嫌いだった。だから昨日の夜、正確には今日の明け方の彼女は、

“すっかり騙されちゃった!”

事になる。何しろ徹夜をして思考力と言うものがまるで無かったんだから。そこで

「よし！」

寝ている男から目をそらし、ポンと手を叩いた。

「無かった事にしよう！」

それが良い。そう一人微笑んだはずが、

「それって無いんじゃないの？あずさん。」

裸の男がいきなり起き上がり、がばっ！

「うおっ！？」

明らかに

“男の腕”

っていうのに抱きしめられ、彼女は思いっきり固まった。首筋にザラって当たるのはこの男の無精髭で、

「ふんふん」

って低くなっているのは

「何歌ってんのよ。」

むっとした彼女の声に逆らう

「ご機嫌だから。」

って調子こく男の喉。でもって絡み付く

「逃がしませんよ。」

って言う囁き。その指先が彼女の押さえている胸元のシーツをつつつつと引つ張る。

「何さらす！」

その端っこをがしつとつかみ、切れ長の強い瞳で彼を見返す。今まで誇っていた

“鉄壁な”

防御はどんな男にも効果があつた、はずなのに・・・。

「恥ずかしがらなくても。」

市原はへらつと笑いながらよりによって体を擦り付けて来た。といつか、彼女にとってはそうと思えない、うあああな行動にで

た。拳げ句に

「着やせするんだね。」

クスクスと笑いながら目線を落とした。もちろんそこに有るのは・・・。

「Dは有るよね。」

彼女の胸元がギュッて寄る位強く抱きしめられ、あずさの頭に

“セクハラ”

と言う言葉が浮かぶ。

「絶対、嫌!!」

昨日の夜の私は絶対におかしかった！自分が男を、しかもこういう浮ついたタイプの馬鹿を選ぶはずが無いって、もう自信満々で彼の事を力一杯振り払った。

「悪いけど、昨日の事よく覚えてるし、アレ、成り行きだから。あくまでな・り・ゆ・き。だからしつこくしないでくれる。はい、もうお終い!!」

でもってえいやって、まっばのままでベッドの横に仁王立ちで降り立った。こういう時、恥じらっちゃいけないって知ってたから。

“可愛らしく”

したらまず間違いなく

“誘ってる?”

って思われるって。だからあえて

“太々しさ”

演出したつもりだった。のだが・・・・・・。

「何これ？」

胸の上に散らばったいかにも

“内出血”

「覚えてるんでしょう?」

まるでワープでもして来た様な素早さで彼に背後を取られていた。

「愛し合った印だから。」

その内容というより、

“それを言うのか？”

と言う意味で、あずさは半ば気を失いかけた。そう、これは夢、夢、夢。

「夢オチだ！って叫んでも良いですか？」

にっこり笑う彼女に

「すぐに現実戻してあげますよ。」

市原はヒョイツと彼女を抱き上げバスルームへと消えて行った。

「暴れると落ちますからね。」

と言う言葉を吐きながら。

つづく

1 夢落ちにさせてください（後書き）

ブログで展開しているお話です。

2 ハロウィン・ナイト

“やけくそ”

と言っのはこの時の彼女の為に有ると言っても過言ではなかったはず。体力で叶うはずが無い。何しろあずさはかるうじて155cm 有るか無いかの身長で、反してかれはまるっと上を見上げでやっとな顎を見上げる大きさ。その上妙に口がうまい男だった。そう、口がうまいのだ。

初めて会ったのは1ヶ月前。マイナーな美術展を見に行ったときの事。

「この絵が気に入りましたか？」

彼はへらへらと声をかけて来た。

「まあね。」

もちろん関わりたくはないからぶっきらぼうに答えたはずだった。つまり

“うぜっ！あっち行けよ”

である。それなのにこりもせず食いついて、

「僕はこの作家のこの表現が好きなんですよ。」

と来たもんだ。美術を専攻していた彼女としてはどうしても反論しなくなり

「ああだ、こうだ」

言ってしまったのが運のツキ。

「あっ、そうだ、じゃあ来週、ピカソ展に行きましょう。丁度チケット2枚有ったんです。良かった。一緒に行ってくれる人が見つからなくて困ってたんです。ありがとうございました。」

それから

“1階 カフェコキーユ前 10時”

と書いた紙を彼女に押し付け

「必ず待ってますからね。」

と逃げる様に去って行った。

「あつ、イヤ、それは……」

その日は仕事。それに行く気なんかまるで無い。のに。

「アドレス書いてけよ、あの馬鹿男!」

それが作戦であつたのだが。

仕方ないから律儀な彼女は勤務交代を申し出、行ったのである。

挙げ句に

「レストラン予約してしまった。」

その上

「誘つたのは僕だから。」

巨匠ピカソ 愛の創造の軌跡 スペシャルメニュー ハウスワイン
付き なるランチまで奢られ

「これ程度の料理じゃ満足してもらえませんか? 今度は夜のコースでもう少し改まったお店を選んで……」

もうこれ以上のさばらせる訳にも行かず

「でも今度は私が、お昼に。」

と

“ 昼飯だけで十分だ ”

と言わざるを得ない所まで追い込まれた。

それからというもの、ことあるごとにつきまとわれ昨日の夜はついに職場までやって来たのだつた。

「はじめまして皆さん。僕は市原直継いちはらなおつぐつて言います。あ、いや、あずささんとは真剣にと付き合いさせてもらっているつもりです。」

よりによってドラキュラの扮装、青白いドローン、のくせに耳だけ真っ赤にしながら彼は頭を下げた。

「お世話になります。」

さて、お世話になるのは誰の事なのか、彼の事なのか、あずさの事なのか、その解釈の微妙なラインに同僚一同騒然となった。

「どこで見つけたの、あんな良い男!」

仮装をしていても良い男は良い男って事で、月2回のコンパを欠か

さない友達の真理子がトイレに逃げ込んだ彼女に迫って来た。むっ
としながら

「全然良い男じゃないし。」

と反論するものの、そんなウマの耳になんとやら。

「そんな事聞いてない。どこで見つけたかって事よ！」
勢い負けして

「美術館で拾った……。」

そうかその手があったか！と真理子はガッツポーズ。

「でもその前に、良い男の知り合いは良い男！！良い男、紹介して
もらわないと！」

友達なんて名前だけ。真理子は自分の獲物の為にあずさを市原に売
り渡した。

「今日彼女、映画館の札きり係で。」

あずさが勤めているのは地区の文化センター。そしてその夜はハロ
ウィンで、オールナイトの映画祭だった。

「その真向かいにラウンジ有りますから良かったらそこで待ってる
と良いですよ。」

と期待に胸膨らませた声で言った。

「あなたの子猫ちゃんの事も見張ってられるし。」

ちなみにあずさのコスプレはキャットウーマン。結構これが人気あ
りで、周りを写している振りで携帯で写真を撮ってるヤツもしばし
ば。

「恩にきます。所で、真理子さん、でしたよね？真理子さん、今彼
氏います？僕の友人でいいヤツいるんですけど、今度一緒にコンパ
でもしませんか？あつ、僕はあずさと組みますけど。」

類とも。二人は邪悪な笑顔で笑った。何しろハロウィン。彼、吸血
鬼。彼女、魔女。

『ひひひ。』

って笑いが聞こえてきそうな二人組。

そして年に数度しか無い夜勤明け、毎日12時にはぐっすり寝て

いるはずのおこちゃまあずさはさくつと
「じゃあ僕が連れて帰りますね。」
なんて彼の車に押し込まれた。

つづく

3 “脅迫” って知ってる？

もちろんバスルームに引き釣り込まれ抵抗しようとはした。した事はした。でも

「そうだ、後で昨日の夜の写真見せてあげますね。」

の言葉に彼女は

『写真って、何の写真だよ!!』

今朝の自分の姿を見て目の前が真っ黒になり、やがて白く浮上した。この時思ったのは

『ガンジーになりたいなあ。』

つまり、無抵抗主義。それでもって、正義は勝つのだと。でも彼の言う所の

『愛の法則は重力の様に働く』

事をすっかり忘れていたのは墓穴。性悪でも愛は愛。

なすがままに体を洗ってもらい、の、ボディクリームつけてもらい、の。

「少し大きいけど。」

って彼にとつては最高に

“ツボ!!”

な膝上のナイトシャツを着せられた。

温かい紅茶を受け取りながら、居心地の良いソファに彼女は丸くなっていた。見えない様になってさっきから何度もシャツの裾を引っ張る仕草に彼が

“それよそれっ!”

な満足笑いをしている事に気がつくはずも無く、

“初めての女”

って面倒くさいって言うじゃない?色々有って。」

含みを持たせて毒を吐いた。

「あなた、マゾ?」

でも

「それ有りだね。」

つて、むしろ

“今言ったそれってどっちのそれ？処女オツケー？それともどMって事？”

そんな混乱させる返事に目を白黒させた。それでもめげず

「ほら私、初めてだから。これからの事考えて一人に縛られる気ないし。」

「ああ、それだったら大丈夫。」

彼はまだまだ熱いはずの紅茶を器用に飲みながら

「もう僕は君に縛られてるから。」

危うくカップを取り落としそうになったのは彼女の方で。動揺を悟られたなくてそつとカップをテーブルに戻し

「うち、父親厳しいから。つき合うとか言ったら不必要にうるさいよ。」

さあ、これはどうよ？この手の遊んでる男は

“父親”

出して来るとひるむから。

「あゝ。」

市原は困った様に眉をひそめ

「明日挨拶に行くんじゃないかなあ？」

いや、ヤメてくれ。彼女の口の端がぴくつと痙攣し、かろうじて

「第一私の好み、あなたみたいなタイプじゃないし。」

ぶいっつと横を向いた。

「そっかあ。」

彼はさすがに気落ちした声で頭を振って、テーブルの上に手を伸ばした。

「じゃあどいうタイプが好みなの？」

そりゃもう、と言いかけ振り向いた彼女はかろうじて

『げっ！』

と言わずに堪えた。そこにいた彼は縁なしの華奢な眼鏡をかけていて、ふわりとかかる前髪がとてもはかなく見えたから

『それです。いや、正にそれ。』

なんて、言えやしない。あんまり男臭くなくて、繊細な感じのする眼鏡の似合う男の人、なんて言えやしない。でもって言葉につまり逃げの一手で

「教えない。」

うつむく彼女に

「狡いよ。」

彼がついつと近づいて思いつきり下から覗き込まれ

「僕はいくらでもあずささんの好みの男になってみせるよ。」

彼女の唇を

「ぺろんっ。」

舐めた。その上

「ひっ!」

ってシャツの襟元をかき合わせた跳ねたあずさを

「可愛い。やっぱ放したくないよ。」

って押し倒した。ついでに

「寝顔も可愛くて写真撮っちゃった。あっ、これ犯罪かな?」

彼女の抵抗を根こそぎ奪った。

つづく

4 トリック or トリート

あずさは今までこれほど自分が

“流され易い”

とは思っていなかった。ついでにハンサムな男って得だよなって。

もしこれで相手が不細工な男だったら明らかに犯罪だけど、この場合

“立証”

つてのが無茶苦茶難しいって、いくら男が嫌いなあずさでも分かった。彼は間違いなく格好良い。身長高くって、虫歯も無くて（これは凄いと本心から褒めていた）デブじゃない。よいうより、スタイルグッド。部屋の趣味も良いし、たぶんそこそこお金持ち。しかも手段はえげつないけど、

「寒くない？」

つて夕闇の中を引き寄せられ、布団掛けられたりして。基本的に優しいし。

「何で私だったの？正直に答えてよ。」

胸の中がもやもやしていた。

「ん〜。」

彼は少し考え込む様にしてから

「正直に話すから、あずさにも1つお願いがある。それでも良い？」それはそれは真剣な目つきで言った。

「毒を食らわば皿までよ。」

きつと睨みつけられ、彼はにいつと笑った。

「以前から君の事、知ってたから。」

「へっ？」

何となく心当たりは有るだけに、あずさは目に見えてむっとした。

「ああ、そう言う事ね。」

「そう、そう言う事。」

彼は鼻歌まじりで彼女の髪を撫で始めた。

彼女の苗字は

“白玉”

と書く。白玉団子の

“白玉”

で、

“白玉あすざ”

超目立つ。もちろん幼い頃のあだ名は

“白玉小豆”

その上父親がそれなりに有名な会社の会長をしていたから、超・超有名で、それ狙いの男つてのは多かった。

『だから男は嫌い。』

彼女は心で呟いた。

『そんなに逆タマ狙うんだったら、私の父親と結婚しろっうーの。』

この時、矛盾は一切無視である。ここはカリフォルニアでもなければオレゴンでもない。日本の法律は

“異性婚”

そんなあずさの心中を彼は見て見ぬ振りをする。

「最初君を見かけたのは、会長の机の上だね。家族三人の仲のいい風景だった。」

そのデスクの有様を想像し、彼女は

『偽善者めっ！』

って思った。何しろその父親は母が死ぬ時も仕事で忙しく、見舞いにすら来やしなかったじゃないかと。

「で会長が時々嘆くんだよ、

“娘がね。”

って。」

『そりやどついう事だい！』

むかつときたあずさは振り向いて睨んでやろうとするのだが、如何せん、むぎゅって抱きしめられて身動きが取れず。

「娘に理解してもらえない事がこの世で二番目に悲しい”

つてね。で興味がわいたんだよね。あの有能な会長を悩ませる性悪な娘って、どれほど凄いだろうって。」

それから猫の様にゴロゴロと喉を鳴らし

「美術展で初めて見かけた時はびっくりしたよ。でも興味は有ったから探り、入れちゃった。どうせだったら遊んでやろうかって。」

『もうすでに遊ばれてるよ!』

心の叫びは彼には届かない。それどころか、彼は追い打ち。それはそれは甘い声で

「でも話してみてびっくりさ。もう僕の好み、ドンピシャ!想像していた君とはまるで違う、食べちゃいたい位凄く可愛い子猫ちゃんだった。」

とのたまった。あずさ、失神寸前。

「じゃあ、次、君が僕の望みをきく番ね。」

いや、望を聞くなんて言っていないしって反論が遅れ

「はい、選んで。」

彼は用意していた二つの箱を取り出した。両方真っ白。でも大きさが違う。

「なによこれ。」

「だから、君が選んで。」

腑に落ちないから

「う〜」

つてな感じで睨んでいると

「怒った顔も可愛いよ。」

彼はにこって笑ってみせて

「どっちかには僕の精一杯の気持ちを込めたプレゼントが入ってるから。これは運だっと思ってさ。僕もこれで覚悟決めようかと思ってるから。」

文系の彼女は字面を直訳する。つまり

“プレゼントの方を選ばなかったら私につきまとうのはヤメるって事だよな?”

憶測は危険だと言っ事を彼女は知らない。

「じゃあ……。」

あずさの頭の中で舌切り雀が言いました。

『小さい箱を選ぶんですよ。』

舌の無い雀がどうやってしゃべったの？っていう小学生レベルの突っ込みも今のあずさには浮かばない。

「こつち。」

小さいのを選ぶ。

「ありがとう。」

ハートマークの飛んだ彼の返事に

“外した！”

彼女は直感した。

「あつ、駄目。こつち!!」

そして指差すは大きなお箱。

「こつちにする。」

そして取り上げ、口元をぎゅっと引き結んだ蒼ざめる彼の顔に

“にやり”

と笑った。そう、男なんかいらぬ。いくら格好よくても、好みのタイプでも、経済力が有っておしゃれでも。一緒になつて苦労するのは女だから……。

「本当にそつちで良いの？」

彼の声は静か。その沈んだ声に

「絶対こつち！」

そう答え、さくつと箱を開けてしまった。昔話には深い教訓が有ると言っ事を身をもつて知るハメになるとは露思わずに。

つづく

4 トリック or トリート（後書き）

次話で最終話になります。

5 棺桶に堕ちちゃった話し

「??????」

そこに有ったのは携帯電話。しかも革バンドのストラップ付き、新品じゃない誰かが使用している電話。

「はい、貸して。」

彼はやりわりとそれを受け取りワンプッシュでコールをした。

「君が選んだんだからね。」

首を傾げるあずさの前で

「こんばんは。こんな時間に失礼します。いや、プライベートな物件なんですよ、ええ。いえ、お恥ずかしいのですが、以前奥様の事を「一目惚れでどうしても忘れられなかった。」

「つておっしゃってましたよね。それが僕にも起きてしましまして。」彼の眼鏡がきらりと光った。

「ええ、ええ。その一件は残念でしたね。確か社運をかけた一大プロジェクトが動いていたんですよ。心中お察します。従業員全てに対して責任をお持ちでいらっしゃいますからね。」

そこは今まで彼女には見せた事の無い明らかにお仕事兼用プライベートモード。

「ええ、僕も同じで手放したくないものですから、結婚を前提に口説いている所なんです。」

物凄くヤバイ雰囲気逃げ出そうとした彼女の腰に

「がしっ!!」

腕が絡み付き、

「はい、仲人ですか？それはありがとうございます。」

震えるあずさの頭のでっぺんをとんがった顎が

「こっんこっん」

リズムカルに叩いた。

「ええ、そうして頂けると凄く嬉しいのですが如何せん、彼女に僕

は役不足らしくって。というか、本気が伝わっていないという所でしょうか。」

電話越しに漏れて来るところかで聞いた事の有る様な笑い声。

「えっ、そうですか。じゃあ彼女と変わりますよ。」

いきなり携帯を押し付けられ

「僕の上司。」

そんな事いきなり言われても

『何しゃべれって言うのよ!!』

とりあえず大げさに口だけ動かした。その耳に

『はじめまして、白玉と申します。』

聞き覚えどころじゃない声が響いた。

『私は市原君の上司ですが、ええ、彼はとても良い青年ですよ。はは。欲を言えば私の娘婿になつて欲しい位たのもしく思っています。ここはせつかくですからいかがでしょう。彼の気持ちをくんで頂けませんか?』

それはどこから聞いても自分の父親の声だった。声を出せるはずの無い彼女の耳元で彼が呟いた。

「選んじやったね。」

彼に電話を奪われ

「スミマセン会長。」

その白々しい声を聞いた。

「あずさ、照れてしまつたみたいで。」

彼は知能犯だったりする。彼女も気がついていたらけれど、まさかここまでいくとは予想だにしていなかった事も確か。

「えっ、娘さんと同じ名前?それは奇遇ですね。彼女のフルネームですか?」

わざとらしく送話部を押さえ、しかも大声で

「あずさ、君に夢中になつていて苗字を聞いていなかったね。」

彼の口元から牙が見える様な気がしたのは夢か幻か。

「白玉あずさだそうです。」

「夢オチって、無いの？」

脱力寸前のあずさに最後の一撃は襲いかかった。

「えっ？会長の娘？まさかそんな夢みたいなお話があるんですか？あははは、いえ、正直申し上げてナンパだったんです。」

もう、だめ押し。

『あずさ、おめでとう。』

一瞬だけ彼女の耳に当てがわれた携帯ははっきりそう言っていた。それから数分後、彼女の結納の日取りは

「今すぐスケジュール確認しますね。もちろん友引の吉日で。大丈夫ですよ。あずさの職場の人達も僕達に好意的でしたから。」

という非常に有能な会長秘書の手によって決められてしまっていた。ハッピー・ハッピー・ハロウィン。彼はにんまり微笑みながら、腕の中で暴れる子猫を抱きしめいたくご満悦でした。小さな小箱から取り出したのは小指のサイズのプラチナのリング。

「じゃあこれは返品で、石のついたものを選ばないとね。」

ここで

“最初っからそのつもりで”

買う時に

“もしかしたらダイヤリングに変更してもらうかもしれない”
なんて言っ

て “喜んで交換させて頂きます”

そんな会話をしていた事は、秘密。

その後彼女がいくら

『騙されたー!!』

って叫んでも、いや、叫べば叫ぶほど

『照れてる……。可愛い……。』

ってからかわれましたとさ。

おしまい

5 棺桶に堕ちちゃった話し（後書き）

ここまでおつき合い頂きありがとうございます。

ハロウィンのお話だったのに季節外れになってしまっていて反省。

この次はシーズンらしいもの仕上げますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195f/>

ハロウィンの悪夢

2010年10月9日04時13分発行